

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2020 年

No. 106

2020年1月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2020 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

JASE性教育研修セミナー2019 in大阪・報告・・・ 1
JASE性教育研修セミナー2019 in青森・報告・・・ 9
思いこみのめがね²²・・・ 11
性教育の現場を訪ねて³⁴・・・ 12

多様な性のゆくえ³³・・・ 14
今月のブックガイド・・・ 15
JASEインフォメーション・・・ 16

● JASE 性教育研修セミナー 2019 in 大阪・報告

令和時代の若者は、不活発化でセックスレス!?

～日本と中国の「性行動調査」にみる若者像～

はじめに

2019年12月14日(土曜日)大阪浪速区の大阪府立大学 I-Site なんばにおいて、JASE 性教育研修セミナーが開催された。日本性教育協会が実施した「第8回青少年の性行動全国調査」の報告と、ほぼ同時期に実施された中国(北京、上海、広州)の性行動調査の分析報告、現代の若者の性行動・性意識の変化、これからの性教育のあり方などが議論された。参加者は、スタッフも含め35名であった。

ここでは、その分析報告の概要及び参加者の声を紹介する。

講演① 性行動・意識の消極化と分極化

武蔵大学社会学部准教授の林雄亮氏は、「性行動全国調査」の第1回(1974年)から第8回(2017年)まで、おおむね6年間隔で行われた調査の結果から性行動と性意識の変化を分析、その結果を報告をされた。

林氏は、第1回から第8回目の変化を次のように述べている。

第1回(1974年)調査から第2回(1981年)調査にかけては、性行動の経験率の上昇がみられた。しかし、第3回(1987年)調査にかけては逆に多くの項目で経験率の低下。その後、第4回(1993年)調査では大学生、高校生、とくに女子を中心とする性行動経験率の上昇が確認されはじめ、男女差の縮小傾向がみられた。

一方、第5回(1999年)調査、第6回(2005年)調査では、青少年層全体で一貫した性行動の活発化がみられ、性行動の日常化・早期化とともに、男女差も消滅してきた。

第7回(2011年)調査では、それまで続いてきた性行動の早期化や日常化のさらなる進行ではなく、一転して多くの性行動において経験率の低下、さらには、性の心理的側面において性的関心の低下や性に対するイメージの悪化がみられ、青少年の性行動、性的関心の分極化、すなわち性に積極的であり活発な層とそうでない層に分化が生じ、青少年の性の実態において新

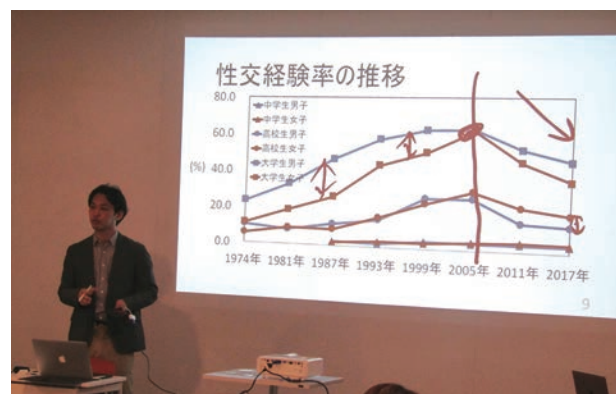
たな様相が浮き彫りになっているという。男女の差では、第6回（2005年）調査では、ほとんどなくなったが、その後は開いている。

今回の第8回（2017年）調査では、男女差がさらに広がっているとともに性行動の経験率（デート・キス・性交）は、高校生・大学生を中心にさらに低下し、性行動のさらなる不活発化が進んだことが明らかになったという。

林氏は、第1回から第8回までの調査結果から見てきた変化を解説した後、何歳までに何%が経験したかを3つの世代（1980年代生まれ、1990年代生まれ、2000年代生まれ）で比較、出生コホート別にみた性行動・性的関心の累積経験率、つまり世代による違いの分析結果を発表した。

世代差については、1970年代生まれは大学生段階における性行動の活発化が特徴であったのが、1980年代生まれでは中学生・高校生段階における活発化と男女差の縮小が起り、1990年代生まれでは高校生・大学生段階における不活発化と男女差がほぼ消滅した。しかし、2000年代生まれではとくに女子において中学生段階における性行動の経験がやや高い傾向がみられるようになった。これら3つの行動のなかでも性差のあり方は一様ではなく、デート、キス経験では新しい世代になるにつれて女子先行の状態から一旦男女差が縮小し、2000年代生まれにおいて再度女子先行の傾向が確認できる。性交経験では1970年代生まれでは男子先行だったのが1980年代生まれでは男女差が縮小し、その後1990年代生まれでは再度男子先行の状態となり、2000年代生まれでは女子先行へと一変している。

2000年代生まれの情報は今回の第8回（2017年）調査データでもわかることは限定的であり、今後の経験率の上昇がどのようなものになるかは予想できない。しかし今回得られた情報に限れば、男子では他の世代と比較したときの相対的な経験率の低さ、女子では中学生段階における性行動経験の活発さが目立っている。またこの世代における性行動の女子先行の状態は、新たな様相とみることができるという。



性的関心の経験については、男女ともに新しい世代ほど経験率が低く、またその傾向は女子で著しく、17歳時点での経験率は1970年代生まれから順に、75.2%、70.8%、54.6%、39.4%である。2000年代生まれの17歳時点での性的関心の経験率は、1970年代生まれのほぼ2分の1に過ぎない。

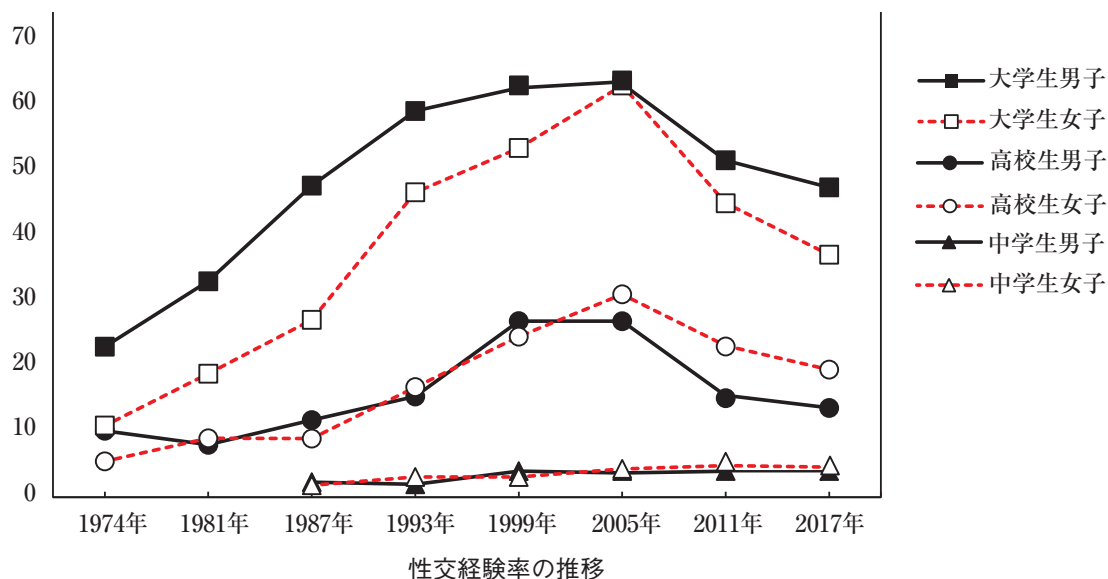
林氏は、性的関心についての世代間の差について、次のように分析している。

性的関心についての自己認識は、必ずしも時代を通じて、また同一世代のなかで一貫しているわけではない。同一世代の人々でさえも、調査時の年齢段階によって性的関心をもった経験に関する回答傾向が変わっていることを指摘。また「性的関心をもった経験がない」ということの背景には、性情報が日常に氾濫しているがゆえに関心をもたなくなっていることや、そもそも「関心をもったことがある」とは言いだしにくい環境へと変化した可能性が示唆される。このように性的関心の経験の遅れについては様々な解釈が可能だが、1990年代生まれ以降の世代では、それまでとは異なり、明らかに性への態度が変容していることがわかるという。

青少年の性行動における新たな様相については、次のように分析する。

第7回（2011年）調査までの結果から、全体的な性行動の消極化のなかで一部の層における性行動の低年齢化が確認されているが、この状況がさらに進行している。第8回（2017年）調査では性行動の経験率が、1990年代から2000年代の最も性行動が活発であった時期を通り越して20～30年前の水準にまで低下したのと同時に、2000年代生まれのとくに女子において10代前半における性行動の経験率が高まっている。

性行動における性差の拡大という新たな様相が確認



されはじめています。1990年代以降、性行動における男女差が縮小し、一旦は消滅したとも言われたが、性行動の発達プロセスにおける男女の違いは最近の世代ほど大きくなっており、2000年代生まれではそれ以前の世代と比べてデート、キス、性交経験において女子先行の状況が際立っている。

性の心理的側面とも言える性的関心については、男女ともに遅れが生じているという意味での消極化と、新しい世代ほど性差が拡大しているという分極化が同時に進行している。性的関心と性行動の経験の有無によって区分されたグループの割合に着目すると、第6回（2005年）調査以降、女子ではいずれの学校段階においても関心なし・経験なし層が増加し続けていること、その一方で関心なし・経験あり層の存在も無視できないものとなっていることが明らかになった。

性行動の経験率だけをみれば、青少年の性行動は2000年代後半からはじまった不活発化のトレンドを維持しており、草食化のさらなる進行と結論づけることができるが、そう単純ではない青少年層の分極化である。性行動や性意識における性差の顕在化、一部の層における性行動低年齢化のさらなる進行、そして全体的な性行動の停滞のなかで、より複雑化し分極化する青少年の性のあり方に対しては、より一層の考察とそれに基づく教育が必要であるという。

林氏は、講演の最後で、スマホと性行動の消極化の関連について私見を述べている。少なくともスマホの保有は、性行動を消極的にしてはいない。情報メディアの端末の影響は普遍的で、「スマホの普及とともに」

とは言えるが、「スマホの普及によって」とは言えないと語った。

講演② 避妊行動の実態と性教育の可能性

帝塚山学院大学人間科学部教授の土田陽子氏は、若者の性に関する事例から話を始めた。2015年11月、妊娠中の3年生の女子生徒（18歳）に京都府立の高等学校が休学と通信制への転籍を勧め、そのまま卒業するには球技と持久走などの体育実技の補習が必要になると説明していた事例をあげた。



この高等学校の対応に対して文部科学省と京都府教育委員会の見解を示した。

文部科学省は、「妊娠と学業は両立できる。本人が学業継続を望む場合、受け止めるべきで、子育てに専念すべきとなぜ判断したかわからない。周囲の協力を得ながら育児するのは働く女性も高校生も変わらない」と、高等学校現場の下した判断と行動を批判。

京都府教育委員会は、「高校には、それぞれの生徒の状況に応じて配慮するようにと繰り返し言っている。妊娠も、病気やけがと同様に配慮が必要」との見解を示し、「妊娠した生徒の体育授業について実技ではなく、レポート提出や軽微な体操で配慮できる」と、

普段から学校現場を指導している旨の見解を表明。

文部科学省の2018年の通知「妊娠した生徒への対応等について」の内容についても触れ、通知の概要を示した。

- ①母体の保護を最優先にしつつ、教育上必要な配慮を行う。
 - ・体育の実技を見学や課題レポートで代替
 - ・養護教諭やスクールカウンセラー等を含めた支援
- ②学業継続の意思のある場合は、安易に退学処分や事実上の退学勧告を行わない。
- ③退学せざるをえない場合であっても進路に応じた情報提供を行う。
 - ・再び学びたい者は、高等学校等就学支援金の対象になる。

文部科学省は、学習指導要領にもとづき、生徒が性に対して正しく理解し適切な行動がとれるよう性に関する指導を保健体育科や特別活動で行うなど、学校教育全体を通じて必要な指導を行うこと、と性教育の必要性を述べている。

しかし、土田氏は、現状の性教育に関する指導には、問題点があると述べる。

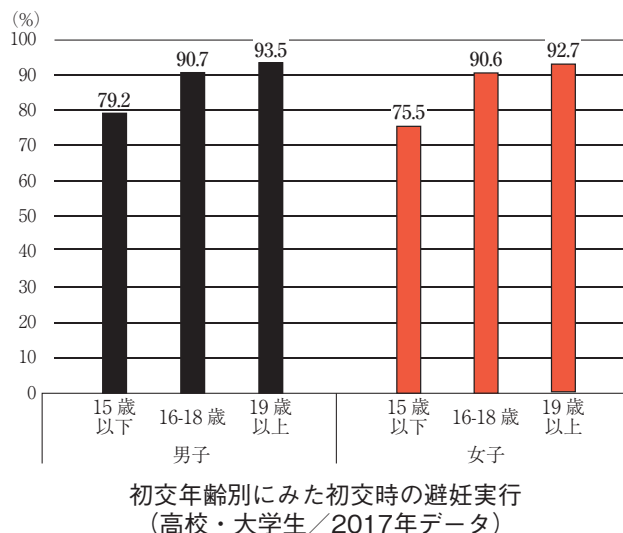
現在の学習指導要領では、「性交という妊娠の経過は扱わない」ことになっている。その上で必要な場合は、全体指導ではなく、グループ指導や個別指導を勧めているが、そもそも指導が必要な生徒をどう見分けるのか、という問題があると土田氏は言う。

現状の学校の性教育には、いくつかの問題点があると、次のような点を挙げた。

- ◎高校2年、3年で避妊や中絶を学ぶ学校が多いが、間に合うのか。
- ◎高校に行かない者、高校を中退する者に対してどうするのか。

その根拠として、文部科学省が2018年に公表した「公立の高等学校（全日制及び定時制）における妊娠を理由とした退学に係わる実態把握結果」を紹介。それによると2015年～2016年度に妊娠の事実を学校（高校）が把握した生徒数は2098人（全日制1006人、定時制1092人）である。そのうち退学したのが39%であるという。

土田氏は、以上のような現状を紹介した上で、本題の「青少年の性行動全国調査」における避妊行動の実態と性教育の可能性について解説された。その概略は



以下の様な内容であった。

調査では、初交時の避妊の実行については、高校生・大学生の性交経験のある者を対象に、「した」、「しなかった」、「わからない・覚えていない」の3つの選択肢でたずねている。

初交年齢を15歳以下、16～18歳、19歳以上の3グループに分け、初交時に避妊を実行した者の割合をみると、初交年齢が15歳以下の者の初交時の避妊の実行率は、男子79.2%、女子は75.5%であり、16歳以上で初交を経験した者と比較すると、男子で10ポイント以上、女子は15ポイント以上低い値となっている。つまり、学校の性教育で避妊について学ぶ前の年齢層にあたる15歳以下で初交を経験した者の避妊の実行率は、それ以上の年齢層よりも低い。この結果は、15歳以下での避妊教育の必要性を示唆していると言える。

初交時に避妊をしなかった者を対象に、初交年齢が15歳以下のグループと16歳以上のグループで区別した集計では、初交年齢が15歳以下のグループの女子の「強く要求されて」の選択率は31.0%であり、1位の「好きだったから」(56.9%)の次に高い。初交年齢が15歳以下で初交時に避妊を行わなかった者のなかには、性暴力も含む合意に基づかない性交が含まれている可能性が考えられると言う。

現在の避妊の実行については、高校生・大学生を対象に「あなたは、セックス（性交）をするとき、避妊を実行していますか」とたずねている。

高校生に注目すると、避妊を「いつもしている」と回答する割合が、男子の72.7%に対し女子は58.5%と

低いことが読み取れる。その分、女子は「場合による」と回答する割合が男子よりも高く、約4割を占めている。「いつもしていない」と回答する割合は男子で2.2%、女子で4.2%であり、やや男子よりも女子のほうが多いが、男女ともに非常に少ない。

大学生では、性別による違いはみられず、「いつもしている」と回答する割合は男女ともに7割を超えている。また「場合による」と回答する割合は2割強であり、「いつもしていない」と回答する割合は1～2%にとどまる。これらの結果からは、避妊の実行を徹底していない層が、性交経験のある高校生男子や大学生においては約3割を占めており、高校生女子にいたっては4割を超えていることが明らかである。避妊の実行頻度という側面からみると、青少年の避妊の実行状況は望ましい状況にあるとは言い難い。

日本では、青少年の間で最も一般的な避妊方法はコンドームの利用であることから、避妊の実践においてイニシアティブの所在が男子に偏りやすいと考えられる。

女子で性交をしたくないとき、相手にその気持ちを伝えることが「できる」と回答したグループでは、膣外射精の不確実性について正しい知識をもっている者のほうが、確実性の高い避妊を実行している割合が統計的に有意に高い。青少年が避妊の方法について正しい知識を身につけることは、適切な避妊行動を促し、意図しない妊娠やそれに付随する様々なリスクを予防するために不可欠である。しかし知識さえ身につけていれば確実な避妊の実行につながるとは限らず、とりわけ女子においては、パートナーとの対等な関係があるこそ、正しい知識を有効に活用できるようである。

男子では避妊に関する正しい知識をもっていることが、確実性の高い避妊の実行に結びついていることが明らかとなった。その一方、女子では、パートナーに自分の意思を主張しにくい関係にある場合、正しい知識を身につけていても実際の行動に反映されないことが示された。パートナーに自らの意思を伝えるという性に関する自己決定権を行使するためのコミュニケーションスキルを身につけることの重要性が示唆されたと言える、避妊に関する調査をもとに行った分析結果を解説された。

その上で、土田氏は、世界における性教育のスタンダードと今後の性教育へのヒントについて触れられ

た。2009年にユネスコが中心になって開発した包括的性教育である「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」(①人間関係、②価値観・態度・スキル、③文化・社会・人権、④人間の発達、⑤性的行動、⑥性と生殖に関する健康、など多岐にわたる)は、対象年齢を4つのレベル(5～8歳、9歳～12歳、12歳～15歳、15歳～18歳)に分けて、それぞれの発達段階に応じた目標と学習テーマが設定されているという。

たとえば、早すぎる妊娠・出産には身体的なリスクがあることや、意図しない妊娠を避ける基本的な方法などは9～12歳に学び、12～15歳になると、より具体的な避妊方法の種類と使い方について学ぶことなど。

性的にアクティブな年齢になる前、すなわち初交を経験する前に必要な知識と情報を与えておくことが重要であるからである、と強調された。

講演③ 中国における性行動・性意識の現状と日本との比較

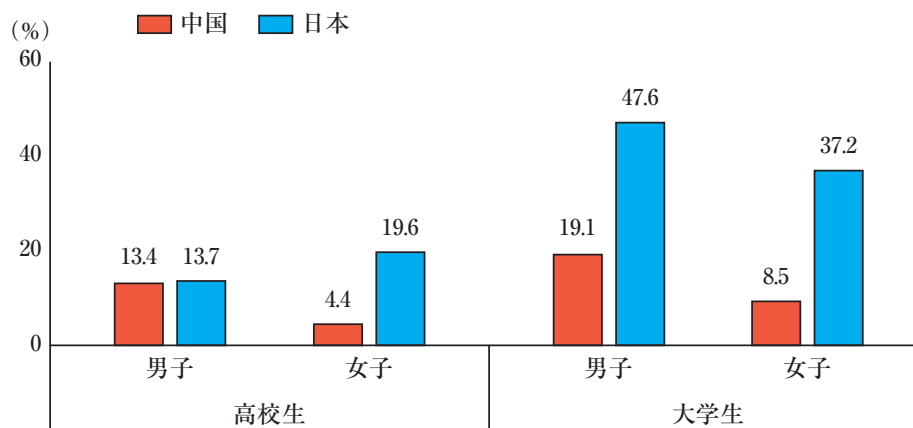
関西大学社会学部教授の守如子氏は、数度の中国訪問、滞在の経験から中国における性行動・性意識の変化を次のように語る。

80年代前半まで、中国の大学でも恋愛は禁止されていた。当時と比べて、いまの中国の社会は急激に変化し、性をめぐる環境も激変している。インターネットの普及により、性情報が容易く手に入るようになっている。しかし、中高生の恋愛はいまでも「早恋」と呼び、中高生にとってはまだ早い行動として禁止されている。

一方、大学生になると、状況は一変する。90年代後半から、大学生の恋愛は一般的になり、大学当局からの禁止もなくなっているという。

青少年の性意識と性行動をめぐる日中比較研究は2回目であり、1回目は30年前の1989年。今回の調査は、北京、上海、広州に在学している中学生、高校生および大学生(短大を含む)で4926名が分析対象である。調査方法は、その場で質問票を記入してもら





日中の性行動の比較・性交経験率

性交経験のない理由

	中国		日本	
	大学生男子	大学生女子	大学生男子	大学生女子
相手がいない	58.9	37.6	73.6	67.7
方法がわからない	12.1	8.8	9.1	9.1
早すぎる	49.3	70.5	18.9	26.2
性欲がない	6.3	14.5	5.1	16.9
性に対する嫌悪感	1.2	2.3	3.7	11.8
めんどろ	8.2	9.9	8.9	10.4
性病が心配	6.0	11.7	9.3	13.6
妊娠が心配	11.1	17.3	8.9	20.2
結婚前にすべきではない	12.6	29.3	8.1	8.8
その他	2.8	4.3	12.9	10.4
N	570	820	900	1458

い回収する自記式集合調査である。質問票は、中学生用、高校生用、大学生用の3種類を用意し、調査時期は、2017年10月から2018年3月まで。

守氏は、初めてデートした年齢の日中比較から話を始められた。

初めてデートした年齢を見てみると、中国の男子は14歳～16歳が多く、全体の54%を占めている。中国の女子は16歳(18.5%)がピークで、次いで15歳(16.7%)、14歳(14.4%)となっている。このように中国の男女ともデートの初経験が、1989年調査と比較すると低年齢化している。日本の場合は、男女とも14歳がピークで、中国より先行していることがわかる。

性交経験については、高校生と大学生のみで「いままでに、性交の経験がありますか」という問いに、「ある」と回答した中国の男子高校生は13.4%で、日本の男子高校生とほぼ同じであるが、中国の男子大学生の

経験率が19.1%で日本の男子大学生の47.6%との差が際立っている。女子の場合、中国の高校生と大学生の経験率がそれぞれ4.4%と8.5%で、日本を大きく下回っている。

性交の初経験年齢を見てみると、中国の男子は18歳がピークで、大学生になった途端、性行動が活発になることがうかがえる。中国の女子は20歳以上が最も多く、次いで17歳、18歳となっている。日本の男子は15歳からはいずれも約15%で推移して、女子は16歳が18.3%と最も多かった。性交の初経験年齢においても、日本は中国より先行していることがわかる。

性交の理由を「愛していたから」としている一方で、性交への評価については「後悔している」と回答する率が目立つ。このように中国の若者が性交に対して慎重な理由としては、大学生が「早すぎる」と回答する率が高いことから性交適齢期の認識が遅いと推測され

る。また大学生女子で「結婚前にするべきではない」という回答が29.3%と日本の大学生女子より高い。これは中国社会において「結婚前の性交は慎むべきである」というセクシュアリティ規範がある可能性を示唆していると守氏はいう。

日本では、総じて、周囲の性交経験率を過大に評価する傾向にある。例えば、高校生男子の実際の経験率は、13.7%であるため、正確に見積もることができていれば「1～2割」という回答が正しい見積もりということになるだろう。実際に、正しく見積もった人も29.9%いたが、過小に「ほとんどいない」と見積もった人（10.4%）に比べて、過大に「3～4割」「半分程度」「6～7割」「8割以上」と見積もった人のほうが多い。

一方、中国では、過大見積もりが控えめであることが見て取れる。例えば、高校生男子の実際の経験率は、日本人とほぼ同じ13.4%であるため、正しく見積もることができれば「1割」という回答が一番正しい答えになるだろう。ところが、最も多かった（22.4%を占めた）回答は「ほとんどない」という過小な見積もりであり、「2割」、「3～4割」、「6～7割」、「7割以上」と過大に見積もった人（合計で、30.8%）との差が日本よりも小さいことが分かった。

「セックス（性交）の経験がないことについて、どう思うか」という問に対し、「とてもはずかしい」「少しはずかしい」とする人は、日本のほうが多い。総じて、「周囲の多くの人が経験している」と過大に見積もり、経験がないことを「はずかしい」とプレッシャーに感じるような仲間内の規範は、中国よりも、日本においてより強いことが分かる。

「性」についてのイメージについて、「楽しい」、「きれい」、「軽い」、「はずかしい」、「めんどうだ」の5項目に対する回答を比較。「楽しい」では、日本より中国のほうが「楽しい」と回答する人が多く、中国では、否定的なイメージを持つ人はごく僅かであることが分かる。

「きれい」というイメージについては、さらに大きな違いが見られる。中国では、「とてもそう思う」「まあそう思う」と、「きれい」という肯定的イメージを持つ人が、日本の「きれい」「どちらかといえばきれい」と答える人をはるかに上回っている。中国における肯定的な回答は、男子と大学生女子において過半数

を占めている。一方、日本では、「どちらかといえばきたない」「きたない」という回答が全カテゴリーにおいて過半数を占めている。

総じて、日本の青少年が否定的な性イメージを持つ傾向があるのに対し、中国の青少年のほうは肯定的な性イメージを持っていることが分かった。

守氏は、最後に性についての知識や情報をどこから得ているのかについて、日本と中国の違いについて解説された。

セックスの情報源について中国の特徴として、中学生や高校生において、情報源が「特にない」人の割合が非常に高い（中学生男子64.9%、中学生女子62.7%、高校生男子33.4%、高校生女子42.7%）。学校段階が上がるにしたがって、「インターネット」、「映像」、「友人」から情報を得ている人の割合が高まっていくが、中でも「インターネット」の占める割合が大学生男子で47.9%、大学生女子で34.7%と非常に高い。

一方、日本では、すべてのカテゴリーにおいて、「友人」の割合が最も高い（中学生男子56.2%、中学生女子43.0%、高校生男子65.4%、高校生女子59.4%、大学生男子62.6%、大学生女子51.5%）。また、学校段階が上がるにつれ、「インターネット」や、男子では「アダルト動画」、女子では「マンガ」などのメディアを選択する割合も高まっていく。

日中を比較してみると、一番の大きな特徴は、中国では情報源を持たない人が多いことを指摘できる。

性の情報源のありかたが日中で異なっていることの背景には、性教育の違いと、性的メディアが置かれた状況の違いがあることを指摘し、性の情報源の違いは、若者の性知識や性情報ニーズにも違いを与えていると言う。

身体的側面に主眼をおいた性教育を受けている日本の若者は、中国の若者に比べて身体的側面を問う知識問題に対する正答率は確かに高かった。その一方で、日本の若者は中国の若者に比べて性情報のニーズは大幅に低かった。日本の若者の性知識もまだ十分とはいえない。性情報のニーズが低い中で、どのように若者に性知識を伝えていくのかが、今後の日本の課題であるとも言えるだろうと講演を締めくくられた。

3氏の講演後、東優子大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授をモデレーターに、Q&Aデ

イスカッション「これからの性教育をどう進めていくか」が行われた。

ディスカッションを始める前に、東氏は、メキシコで開催された第24回世界性の健康学会（WAS）学術集会（2019年10月12日～15日）で採択された「セクシュアル・プレジャー宣言」の内容を紹介された。

配付された東優子仮訳の冒頭には「セクシュアル・プレジャー（快感・快楽・悦び・楽しさ）とは、他者との又は個人単独のエロティックな経験から生じる身体的および／または心理的な満足感と楽しさのことであり、そうした経験には思考、空想、夢、情動や感情が含まれる。」とある。

「セクシュアル・プレジャー宣言」の内容紹介後、30分間の講師と参加者の間のディスカッションが行われた。

ここでは、参加者の声の一部を紹介する。

- 中国のお話はとても、興味深く聞かせてもらえました。性教育の大切さを、さらに実感することができました。
- アジア圏の若者の性実態を数値で正確に知ることができたので、今後の考察や企画に生かしていきたいです。東先生の「セクシュアル・プレジャー宣言」の完成とても楽しみにしています。
- 調査の分析について書籍内容プラスの部分がいろいろおもしろかったです。プレジャーの情報あちこち



で使えます。良かったです。参加者のやりとりも深められました。

- 自分の生徒に対する性教育の悩みや現状を明確にでき、新しく考えることが多くありました。性教育が発展するには、性教育に関心がある人（今日来ていた方々）ではなく、関心がなく、むしろバッシングの考え方がある人の考え方を変えていくことが必要不可欠だと考えています。関心がない人にもこのセミナーの話聞く機会があったらなあと思えます。また、最後のディスカッションでは、いろいろな立場の人のお話が聞けて良かったです。

（文責・編集部）

【セミナー関連の書籍】（本紙18、19ページ参照）

- ・『若者の性』白書
- ・『青少年の性行動／日中比較研究』報告書

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】月～金曜日 10:30～17:30

【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<https://www.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>

◎ JASE 性教育研修セミナー 2019 in 青森・報告

若者の性について、青森の地で考える

北東北性教育研修セミナー実行委員会共同代表 岡田実穂

はじめに

JASE 性教育研修セミナー 2019 in 青森が、昨年 11 月 23 日（土曜日・勤労感謝の日）、青森市総合福祉センター大集会室で開催された。テーマは『「若者の性」をめぐる不活発化、セックスレス、性的被害～「青少年の性行動全国調査」にみる若者像とこれからの性教育～』。

私は、後半の質疑の際のモデレーターとして参加させていただいた。今回は、「青森」という場において性暴力サバイバーや様々な困難の中にある人たち、特にセクシュアル・マイノリティの権利擁護活動をしてきた自分として感じたことを、率直な感想を書くことで、報告とさせていただきたい。

北東北を主体として性教育セミナーを実施しはじめてから、5 年が経過する。地域による情報格差をなくしていきたい、地方の人間は多くの交通費や労力を使わなければ新しい情報が得られないという状況を改善したいという思いから性教育研修セミナーをやらせて欲しいと JASE に掛け合ったのが最初で、今回の企画に関しても、首都圏中心ではなく地方都市でも「調査報告」が第一報としてなされる環境を作りたいという思いがあった。

前回の北東北セミナーの際に、お話をいただいたのが始まりで、告知の段階から、東京、大阪、そして青森で報告会という、関係機関などの方からは「面白い並びですね」と笑いつつ、「嬉しいことですね」という声も聞けた。講師として、弘前大学人文社会科学部教授の羽瀨一代さん、女子栄養大学非常勤講師の茂木輝順さんにお越しいただいた。



調査の趨勢と性的被害の動向

羽瀨さんからは、多くのデータとともに、第 8 回「青少年の性行動全国調査」の概要、そして今回の結果を大枠でお話いただき、主に性被害に関しての報告がなされた。羽瀨さんは、調査結果にどのように社会状況が関与しているのか、現在の社会にどのような要因があるのかということに焦点を当て話され、参加者自らの近い環境の中に落とし込んで考えるきっかけにもなったのではないかと思います。

羽瀨さんから性被害に関しては、ジェンダー規範、人間関係／スキルとの相互性、家庭に持っているイメージなどが被害経験に与えている影響、そして特に若者の被害に関して「友人」との関係のケアに関連する重要性について、データに基づいた報告があり、その中でも印象的だったのが、特に異性愛者ではないと自認している若者の性的被害に関する報告だった。

異性愛のみの人と比べると、性的被害にあう可能性が高くなっており、有意な差が見られたということだ

った。性的マイノリティの若者の被害率が高いということは問題化すべきであり、多様な若者を多様なままに、健康に生きていける社会を構築するのは若者の責任ではなく大人の責任であり、刑法の改正や性に関わる教育の重要性は待ったなし、ということ forcefully 話されていた。



これは…「灯台下暗し!」。私は、LGBTIQ の性被害についての取り組みをこれまでできており、お話しにあった刑法改正に関しても、LGBTIQ の視点での政策提言を続けてきた。しかし、国内での調査が乏しく、国外での調査データを用い、国内に関しては事例として例示していくことをしていた。まさかの「JASE に、あったとは」と、その時点で頭を抱えることとなった。この内容について、報告書には掲載されていないとのことで、見落としではなかったことに若干の安堵を覚えつつ、経年調査という中での扱いは難しいところがあると思うが、どうか、このことについての詳細をどこかで出していただけないかなあと願わずにはいられなかった。

2017 年の性犯罪に関する刑法改正においては、参議院での付帯決議において、男性や性的マイノリティに対しての不当な取り扱いをしない、ということが明記された。私自身は、実質的には公的文書において国が LGBTIQ に対する差別禁止を明記した画期的な出来事であったと感じているのだが、現実として、その恩恵の多くは、当事者たちに届いていない。

今もまだ、被害にあいながら相談機関や捜査機関などにおいて差別的な取り扱いをされる当事者たちは多く、支援が届く以前に、声を上げることが難しいという現状がある。こうしたことに、青森において明確な提言を聞いたことは、本当に嬉しい出来事だった。今後、しっかりと活用させていただこうと思っている。

教科書にみる性教育の課題と可能性

茂木さんからは外国での性教育と日本の性教育の比較、各国の性教育に関する教科書の紹介と内容の解

説をしていただいた。生殖、ジェンダー、セクシュアリティ、子育てに関して、より詳細で多様な提示を若年のうちから行っている各国での現状と、性教育バッシングを経た日本での現状、特に七生養護学校から始まる



東京都での性教育に関する規制の派生、はじめて規定、学習指導要領などがどのように影響したかなどを、隔年でどのような状況が発生しているか、世界的な動向と真逆に進んでいる状況からみた、国内の性行動に関するデータの説明をいただいた。若者の性交経験率や妊娠率の動向や、人工中絶の割合などについては、国内各地での動向を踏まえたお話があり、その後の質疑の中でも参加者の方からの多くの質問もいただくことになり、興味関心の強さが伺えた。

特に、こうした性教育に関する取り組みが、現実的な性行動にどのような影響があるのか、またはないのかについての調査が必要ということについては、まさに、そうしたものが出来れば各地で性教育を進めていく上でも大切なデータとなるだろうなあと期待を込めて思った。

おわりに

質疑の中では、人工中絶に関しての統計は患者の住所地ではなく行った病院ごとの数字であり、居住地から離れた場で中絶を行うということについての問題についてや、医療アクセスの問題、性に関する法的フレームの問題、性被害への介入の問題、草食化の原因、性行動のリスク化、コミュニケーションの問題、「発達段階とは」など、時間を押しながら、会を終えることができた。学生や教職員、医療関係者や、議員、また保護者の立場としてなど、25 名ほどのご参加をいただき、翌日には地方版の新聞でも報告記事を出していただいた。

今回のセミナーを開催するにあたりご協力、ご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。これからもまた、北東北における性教育への学び、そして実践のために、取り組みを進めていきましょう!

思いこみ の ゆがね

シゲせんせーのポジティブライフ

鈴木茂義 Suzuki Shigeyoshi



公立小学校非常勤講師。14年間の公立小学校正規教諭、主任教諭を経験。
専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。

東京から地方に移り住み、新たに小学校の教員としての仕事が始まりました。環境の違いに戸惑うこともありましたが、新しい土地での生活は充実していました。東京から離れたことで、一度自分の人生をリセットしたような感覚もありました。「生まれ変わった」というと大袈裟かもしれませんが、また1から生活や仕事を積み重ねる楽しさがありました。

自然に囲まれた生活、空気も食べ物もおいしくて、あっという間に時間が過ぎていきました。が、地方生活4年目の冬休みに人生を変える出来事がありました。

当時シングルでパートナーがいなかった私は、出会いを求めています。今まではゲイ専用のネットで出会いの掲示板を使っていますが、その頃からスマホが大きく普及したこともあり「ゲイの出会い系アプリ」が流行っていました。私は「せっかくのシングル生活、ゲイアプリも手に入れたことだ。冬休みに茨城の実家に帰省するついでに、東京に寄ろう。東京でいろいろなゲイの人に会ってみたいなあ」と考えていました。アプリは便利なもので、地方にいながら、東京に住んでいる人と気軽にやり取りをすることができました。

そして冬休み、約束をした相手と会うことができました。ゲイの人と会うのは久しぶりでした。最初の待ち合わせは、いつになってもドキドキ。「相手は右から現れるのかな？ 左から現れるのかな？」「もしかしてあの人がそうかな？」など、緊張しながらいろいろなことを考えていました。

そしていよいよご対面！ アプリで初めて知り合ったその人は超イケメン！（笑）テンションが上がりました。台湾料理店でランチをし、そのままお茶をしました。とにかく話したいこと・聞きたいことがありすぎて、どんどん時間が過ぎていきました。お互いにどんな仕事をしているか、パートナーがいるか、タイプの男性はどんな人か、週末はどんなことをして過ごしているか。私は東京でゲイの友達、「ゲイ友」との出

会いがほとんどなかったのも、自分と同年代の人がどのようなライフスタイルなのかとても興味がありました。東京で出会ったその人は、イケメンで仕事も遊びも一生懸命に取り組む人。ゲイの友達も多いし、その上ホームページやブログも持っていました。「すごい！ 都会のゲイの人はこんなにオシャレで素敵な生活をしているのか！」と驚きました。

「もしかしたら、自分の住む場所は東京なのかもしれない」「いやいや、せっかく移住した地方の生活を捨てるのか」「また採用試験を受けるのか」「ゲイとして東京で華やかな生活をしてみたい」と自分の声が、頭の中をぐるぐると駆け巡ります。しかし、あのとき出会ったゲイ友の話が忘れられず、私は東京に戻ることを決意します。

思い立ったが吉日、地方で開かれた東京都教員採用試験の地方説明会に参加。退職することを校長先生と教頭先生に報告。「説明会に参加する前に、相談をすべきでしょ？ 順番が違う！」と叱られます。その勢いで、ゲイで

あることをカミングアウト。「ゲイとして自分らしい生活をするには、東京に戻るしかないのです！」と必死に懇願。校長先生は驚きながらも、「気持ちはわかった。ただし採用試験に不合格の場合は、このままこの学校（地方の学校）に残ること」とおっしゃいました。一刻も早く東京に戻りたいと考えていた私は、残りの仕事にも一生懸命に取り組みました。その姿に管理職の先生も「結局、決断して行動する人がいちばん強いね」と、根負けしたようでした。

その年の夏。採用試験を受けるために再び東京へ。教員経験者枠で受験した私は、30分一本の面接のみでした。そして秋の合格発表。無事に合格。校長先生に報告すると、「シゲ先生の合格を喜ぶたい。嬉しい。けれど悲しい」と。申し訳ない気持ちになりながらも、再び新しい道が開けたことを誇らしく思いました。

こうして2回目の退職が決まりました。私の次の思いは、東京で「ゲイであること」「教員であること」「豊かに暮らすこと」を成立させることでした。

第22回

「2回目の退職」 ゲイアプリと東京ゲイ

[奈良県奈良市立都南中学校] (下)

確かな手ごたえを感じながら取り組む多様な性の授業

奈良市立都南中学校では、人権学習の一環として、多様な性の授業を担当が道德の時間枠で実施することになった。単に授業案をなぞるだけの授業では、生徒たちの心に届かない。担当が自分の言葉で語る必要がある——そんな思いから授業実施までに、3回の研修を行って教員が1つになって授業準備をすすめていった。今回は授業の実践までの道のりを紹介する。

模擬授業の実施

多様な性の授業は、最初の年は2年生、3年生を対象にして、道德の時間の1時間を使って実施することが決まった。

本格的な授業を実践する前に、担当教員の一人に協力を求め、まずは多様な性の授業に取り組む2年生、3年生の担任の教員が生徒になって、模擬授業を行うことになった。

「みなさん、このようなデザインの旗は見たことがありますか？」

授業の導入部分は、レインボーフラッグの画像を見せて生徒たちに発問することから始まった。

授業は、4つの要素から自分の性を考えていき、後半は「ゲイ男性当事者の手記」をもとにグループワークを展開するという流れで、宝塚大学看護学部の日高庸晴教授と奈良県高等学校人権教育研究会が作成した「多様な性を考える授業」の授業案に沿って進められた。

多様な性の授業の取り組みで中心的な役割を担っている松田秀代教諭は「模擬授業の後で、模擬授業に参加していた先生方とディスカッションを行いました。初めての取り組みですから、先生方も不安に感じるが多かったかと思います」。

『導入部で特定の芸能人の名前を出してもいいものか』、『授業中に生徒からこういう質問を受けたら、どうすればいいのだろうか?』など、模擬授業を行ったことで授業を担当する教諭たちが漠然ともっていた不安や疑問があきらかになった。

それをみんなでディスカッションして、一つひとつ

奈良市立都南中学校

校長 宮廻なをみ

生徒数 451名

教員数 35名

(2019年4月現在)

問題を解決していったのだという。

生徒たちの理解をより深めるために

いよいよ多様な性の授業が始まった。

初年度は2年生、3年生に対して50分枠1回の授業を行ったが、授業者たちの感想を聞くと50分の授業では生徒たちの理解に不安があるという意見が出てきた。

「当校の生徒はゆっくりと理解していく傾向があります。そのため、授業案通りに行うと内容が盛りだくさんすぎて生徒たちが十分に咀嚼できないのではないかと、また、授業者も多くのことを生徒に伝えたいあまり、駆け足で授業を進めていないか、という反省がありました」

50分の枠組の中では、生徒たちの気づきを拾う時間がないとの指摘もあったという。

「フレンドリーな生徒が多いので、授業中は担任にどんどん質問をぶつけてくる。その質問に全部答えていたら、とても50分枠では収まらず、生徒も教員も消化不良を起こしてしまう感じでした」

そこで授業時間をもう1枠とって、当初50分だった授業案を45分2回の授業案に作りかえた。

とはいえ、時間割の関係で1回目の授業の翌日に2回目の授業がとれるとは限らない。授業の間隔があい

50分授業案を、45分2回にわけた授業案

【1時間目】

4つの要素から自分の性について考える。

1. 性に関する要素、言葉について知る。
2. 性のありようは多様であることを知る。
3. 性的指向と性自認の違いを知る。
4. 自分も多様な存在の一人であることを知る。

【2時間目】

ゲイ男性当事者の手記を読み、ワークシートを使って意見交流をする。その後LGBTに関する動画を視聴したのち、再度ワークシートに2時間の授業の感想を書く。

- セクシャルマイノリティ当事者の気持ちを受け止める。
- 自分たちにできることは何か、考える。
- どんな社会であれば生きやすいかを考えることが、どんな社会をつくる一人になるのかにつながることを確認させる。

でも授業内容にスムーズについていけるように、授業案を2分割する際に内容を考慮し、1時間目は基礎知識を、2時間目は当事者の思いを知ることを重点的に行う授業案にしたという。

生徒も教師も今を生きる一人の人間

多様な性の授業に向かう生徒たちの態度は真剣そのものだ。

「生徒たちの感想をみると、今までなにげなく使っていた言葉が人を傷つけていたという声が多く、自分の言動を振り返ってみることができたようです。また、2回目の授業では性の当事者の声を紹介しますが、当事者からの発信が生徒の心を打ち、『生きづらさ』を強めているのは誰なのか、自分たちはどのような行動をとれる人になりたいか、などを考えるきっかけになったようです」と松田教諭は語る。

多様な性の授業が自分を見つめなおすきっかけになったと感じているのは、教師も同じだという。

「授業をするときに教師は『うまく教えられるか』と構えてしまいがちです。でも、大事なことは生徒に教えるということではなく、まず自分自身の中にあるものと向き合うことではないでしょうか。教師自身が差別的バイアスをもっていると、生徒に教えるときに自己矛盾が生じてしまうからです」

多様な性の授業を終えて……

【生徒の感想】

- 「自分に置き換えて一度考えるべき。理解できないと思うのは自由だけど、自分の心の中に置いておくべき」
- 「本当の自分」を隠して「偽りの自分」で生きていくってしんどい。
- 人間はそれぞれ違うのだから、それを受け入れてくれる社会になればいいと思う。
- 人それぞれ「普通」は違うので、押し付けるのはよくないと思う。
- 誰もがみな平等のはずなのに同性愛者を差別するのはおかしい。
- 自分が遊びで使っていた言葉ですごく苦しむ人がいることがわかった。これから気を付けようと思った。
など。

【教師の感想】

- 「自分の心の中で考える」「自問自答」など、ゆっくり考えることができてよかった。
- 想像以上に真剣だった。授業をして本当によかった。
- （ゲイ男性当事者の手記については）筆者の思いや考えをくみ取ろうとする生徒が多かった。
- 授業をすることで、自分自身の固まった考え方を見直すことができた。
- （生徒たちは）2時間目の授業のほうがより集中できていた。
など。

松田教諭は「教師だから技術的に教えることはできるでしょう。でも、生徒は教師の言動をしっかりと見ていますから、うわべの語りは生徒の心には響かない」と語る。

「私が所属する人権教育の部門では、各先生方の人権教育は『生きる』ことそのものの教育だとお伝えしています。教師は自分と向きあってどんなメッセージを生徒たちに投げかけるのか。私たちが生きる社会がどのような社会であってほしいのか。その社会を誰がつくるのか、教師も生徒も今を生きる一人の人間として一緒に考えてほしいとお伝えしています」

初年度は、多様な性の授業を50分枠で行った。その反省点を踏まえて、授業案をどうしようかと迷い2018年度は45分授業を2回に分けて行った。3年目にあたる今年は昨年度の授業の積み上げとして、3年生には新しい授業案を作って1月に取り組む予定とのこと。

松田教諭は「授業に取り組んだ教師が新たな発信者となるためにも、校内に授業案をしっかりと位置づけて、継続した取り組みをつくっていききたい」と今後の抱負を語ってくれた。

（取材・文 エム・シー・プレス 中出三重）

カミングアウト10年の時差

明けましておめでとうございます。旧年中の話で恐縮ですが、ラグビーのワールドカップ 2019 に関連する話題をもう一つ取り上げます。

W 杯決勝 2 日前の 10 月 31 日夜、東京・神宮前のコミュニティスペース subaCO（スパコ）に開設されていたプライドハウス東京 2019 では、ラグビーの元ウェールズ代表、ギャレス・トーマスさんと日本ラグビーフットボール協会の谷口真由美理事を招いてトークセッションが開かれた。

プライドハウスはセクシャルマイノリティの人たちが安心して過ごせる居場所と性的指向や性自認に関する情報発信のため、巨大スポーツ大会に合わせ地元で開催される施設である。前号でも紹介したので詳しくはそちらをご覧ください。

トーマスさんは現役時代の 2009 年にゲイであることをカミングアウトし、その後も選手として活躍を続けた。代表歴 100 試合の伝説的名選手であり、W 杯では英テレビ局 ITV の解説者として来日していた。

谷口さんは昨年から協会理事として、日本ラグビー界の改革に当たっている。国際政治学者としてジェンダーやスティグマに対する認識も深い。プライドハウス東京の松中権代表を交えた 3 人トークはこうした施設がなければ実現しなかった企画だろう。

トーマスさんは昨年 9 月 14 日、HIV に感染していることをカミングアウトし、Twitter で《私より先に『公表する』と脅迫し、私の人生を地獄のように変えた悪人の話すことではありません》と述べている。

その後の報道によると、「悪人」とされているのは英タブロイド紙の記者で、トーマスさんが公表を望んでいなかった HIV 感染について記事にしようとしていた。トーマスさんが怒りのコメントとともに自ら Twitter で公表する道を選んだのはこのためだった。

もちろん、カミングアウトは本人が決めることで、他者が強要したり、圧力をかけたりするものではない。大前提としてこの点を踏まえたうえで書いて書けば、「どうして自らの性的指向は 10 年も前に明らかに

しているのに、HIV 感染については黙っていたのだろう」ということも私には疑問だった。日本に伝えられるイギリスの状況では、HIV に対するスティグマがそれほど強いとは思えなかったからだ。プライドハウス東京のトークセッションでもこの点を質問した。

トーマスさんは「エイズで人びとが亡くなることについて政府は 20 年以上前に強力な宣伝を行いました」と語り、こう答えている。

「アンプロテクテッドセックス（感染予防策をとらないセックス）をしないように警告しなければならない。その時は必要なことだったのかもしれませんが、治療の進歩もあり、状況は変わりました。それでも、人びとはいまなお HIV/ エイズに関する当時の宣伝の記憶を持ったままだし、政府もこの点に関する教育にはもう熱心に取り組もうとしない」

どこかの国で聞いたような話だが、イギリスでもそうだったのか……と改めて思う。

トーマスさんはさらに「世界で最も難しいことは何か分かりますか」と問いかね、「教えることではなく、教えなおすことです」と自らの考えを述べた。

10 年前にトップアスリートとして同性愛者であることをカミングアウトした時には、その日の午後、ラグビーの試合に出場している。今回の HIV カミングアウトでも公表当日の午後、トライアスロンレースに出場し、完走した。11 月にスイスのバーゼルで開かれた欧州エイズ会議では、特別イベントに招かれ「スティグマに正面から挑戦したかった」とその理由を語っている。

「HIV に感染していても 2.5 マイルを泳ぎ、112 マイルを自転車で行き、さらにマラソンを完走できることを多くの人に知ってほしかった。私にそれができれば、私たちにはどんなことでも可能です。あの日以来、私のもとには支援と愛以外の何も届いていません」

プライドハウス東京 2019 は W 杯が終了したので閉鎖されたが、今年の夏には東京オリンピック・パラリンピックに合わせてプライドハウス東京 2020 が開設される。その動きにもまた注目したい。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

無知が犯す過ちを防ぐために

「SOGI ハラ」という耳慣れない言葉に惹かれて、この本を手にとった。ご存じの読者もおられると思うが、まず、言葉の説明からはじめることにする。

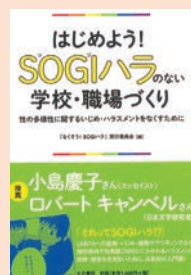
Sexual Orientation（性的指向）と Gender Identity（性自認）に関するハラスメントを略した言葉である。セクハラ、パワハラ、マタハラなどの言葉はよく耳にするが、「SOGI ハラ」は、性教育関連の仕事に十数年かかわってきたが聞いたことがなかった。

本書の冒頭で、「なくそう！ SOGI ハラ」実行委員会の代表の松中権氏は、次のように記している。

この「SOGI ハラ」という言葉を発表したのは、2017年3月に開催した院内集会「第1回レインボー国会」でのことです。その際に、具体的にどのような行為が「SOGI ハラ」にあたるのかという五つの類型も発表しました。すなわち、①差別的な言動や嘲笑、差別的な呼称、②いじめ・暴力・無視、③望まない性での生活の強要、④不当な入学拒否や転校強制、異動や解雇、⑤だれかの SOGI について許可なく公表すること（アウティング）です。

そして、「とくに、LGBT の当事者が自分のセクシュアリティに気づき、悩みや不安をかかえはじめる時期であり、また周囲が無理解のためにハラスメントや差別を起こしてしまう可能性がより高い教育現場にこそ、SOGI ハラの実情を知っていただきたいのです」と、本書執筆の動機を記している。

仕事から、学校における性教育の実践報告や記事をよく読んでいるが、気になる言葉、言い回しに出会うことがある。それは「LGBT の人」というフレーズである。性教育の授業のあとの生徒の感想文によく出てくる。「LGBT の人たちは」は存在するが、「LGBT の人」の存在は不可能といえることは、言葉の意味を



はじめよう！ SOGI ハラのない 学校・職場づくり

性の多様性に関するいじめ・ハラスメントをなくすために

「なくそう！ SOGIハラ」実行委員会編

大月書店

定価 1600 円＋税

正確に理解していれば、わかるはずなのだが……。

改めて説明する必要もないのかも知れないが、L（レズビアン）で G（ゲイ）で B（バイセクシュアル）で T（トランスジェンダー）という人は、存在しない。LGBT は、性的マイノリティの総称として用いられる言葉であることを、LGBT をテーマにした授業を実践している教員が理解していないのではないかと危惧することがままある。

本書は、そのような誤解や思い違いを解消してくれるとともに、アライ（Ally）を自認する者であっても気づかず犯しがちな、間違いやハラスメントを、わかりやすく教えてくれる。本書の構成は、以下のとおり。

○マンガで考える「これって SOGI ハラ！」

「SOGI ハラ」にあたるのかという五つの類型をマンガで描いている。

○基礎から知る「SOGI ハラってなに？」

○学校で起こる SOGI ハラと支援のありかた

○これって SOGI ハラ？ 事例集

学校現場で起きている SOGI ハラの事例を、類型別に示し、何がハラスメントなのかをわかり易く解説。

○SOGI ハラのない学校・職場づくりに必要なこと

小坂くみこ氏（高校教員）、藤井ひろみ氏（慶應義塾大学教授）、松中権氏の鼎談。

○資料編

SOGI ハラに関係する通達や公的文書などを紹介している。

たいへんわかりやすく、具体例を示しているのも、本書を熟読して、教育実践することで「SOGI ハラ」のない多くの教育現場ができるだろうと想像できる。それは一般企業などの職場でも同じといえる。

非当事者で、多様な性のあり方を理解して、支援・応援を自認するアライである筆者にとっても、知ることの重要性、無知の怖さを教えてくれる 1 冊である。

（教育ジャーナリスト 日向野一生）



2月24日（月曜日・振替休日）13:00～16:30



東京HIVと性の教育セミナー2020／東京性教育研修セミナー2020

令和の若者たちの性事情 UPDATE！

性の教育をする前にこれだけは知っておこう

令和の幕開けに「性教育の手引」（東京都）が改定され、性教育の門戸がひろがりました。待ちに待ったこのチャンス逃してなるものか！とはいえ、性教育をする前に知っておきたいことがある。それは、イマドキの若者の性、本当はどうなっているのか、ということ。そこで最新データと新たな動きをとおして若者のセクシュアリティに迫り、新たな性の教育を探ってみましょう。

プログラム1 若者の性事情 UPDATE 3つの視点から

① 2010年代における若者の性

拡大する性差とそれが意味するもの——「青少年の性行動全国調査」からの報告 林 雄亮（武蔵大学社会学部准教授）

② 性と健康

アッという間にHIVを越えた！

若者たちにひろがる梅毒——「ストップ梅毒」検査と治療の最前線から 今村顕史（がん・感染症センター都立駒込病院感染症科部長）

③ 性と人権

同性婚訴訟始まる

同性パートナーシップと何がどう違うのか——同性婚訴訟東京原告の立場から 佐藤郁夫（ぶれいす東京）

プログラム2 クロストーク ゲストとフロアのオープントーク 司会・池上千寿子（ぶれいす東京）

会場 日本性教育協会セミナールーム（東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビルB1）

参加費・問合せ先等 主催：認定NPO法人ぶれいす東京 協賛：日本性教育協会（JASE）

参加費：1,000円・定員30名 事前申込み：Webサイトのフォームよりお申し込みください。
<https://business.form-mailer.jp/fms/9e76a96284989>

対象：教育現場で性教育、保健教育を実践している方、教職員、養護教諭、保健師、助産師など

問合せ先：「ぶれいす東京セミナー係」Eメール：office@ptokyo.org TEL03-3361-8964



3月8日（日曜日）12:30～16:45



SEE (Sexuality Education and Empowerment) 対話型ワークショップ

こんなとき、どうする？ どうみる？

性にまつわるケアと支援者への影響

～トラウマインフォームドケアの観点から～

本セミナーでは、支援スキルを身につける「前」に必要なスキルとして、様々な性の問題をどう捉えるか？ 性的な発達段階をふまえて、遊びと暴力の違いを見極める視点をみなさんと共有します。さらに、性に関する支援を行うことに伴う自分自身や組織への影響を理解します。

支援対象者や支援者自身、そして組織へのトラウマの影響を理解するトラウマインフォームドケア（Trauma Informed Care）の観点から、性にまつわるケアについて、実践的に学びます。

講師 野坂祐子（大阪大学大学院准教授） 吉田博美（駒澤大学学生相談室常勤カウンセラー） 東 優子（大阪府立大学教授）

会場 大阪府立大学 I-Site なんば（大阪市浪速区敷津東2-1-41）

主催 SEE 共催：大阪府立大学女性学研究センター 協賛：日本性教育協会 後援：大阪府立大学教育福祉学研究センター

参加費・問合せ先等 参加費：4,000円（資料代含む） 定員40名（先着順）

問合せ・申込み先：①氏名、②所属、③連絡先（メールアドレスおよび電話番号）を記入のうえ

SEE事務局 kansaishy@gmail.com にメールで申し込みください。

2/2 (日)

10:00~17:00

第13回日本性科学会近畿地区研修会

性にかかわる支援

- 内 容**
- ①「社会福祉士の地域における取り組み」真鼻弘美（きょうとイロ）
 - ②「緊急医療と性」山田妃沙子（関西医科大学）
 - ③「中絶から見えてくること 街中の産婦人科診療所 性の最前線より」佐久間 航（さくま診療所）
 - ④「誰でもわかる性格分析とセックスセラピーへの応用」今井 伸（聖隷浜松病院）
 - ⑤「乳癌治療と性生活への影響」坪田 優（ナグモクリニック大阪）
 - ⑥「JASCT から JSSS、そして WAS ～日本性科学会の歩み～」大川玲子（国立病院機構千葉医療センター）
- ほか

会 場 梅田ガクトホール（大阪市北区梅田 2-6-20 パシフィックマークス西梅田 14 階）

参加費・問い合わせ先等

主 催／日本性科学会

後 援／NPO 法人関西 GIC ネットワーク

参加費／医師・その他：会員 5,000 円／非会員 10,000 円

コメディカル・研究者・教員：会員 1,000 円／非会員 3,000 円

学生：1,000 円

問合せ先／連絡事務局 TEL06-6346-0569 FAX：06-6346-5095

E-mail info@kgn.or.jp

2/15 (土)

9:30~16:00

第20回九州ブロック性教育研究大会・第24回熊本県性教育研究大会

児童生徒が今の性の状況を 賢明に生き抜く為に必要な性に関する情報と性教育

おもな内容

基調講演 10:00～10:50

「新学習指導要領を踏まえた性に関する指導の推進」横嶋 剛（文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課健康教育調査官）

講 演・1 11:00～12:00

「より複雑化し、分極化する若者の性意識・性行動を理解する～「第8回青少年の性行動全国調査」から見えてくること～」
石川由香里（第8回青少年の性行動調査委員長・活水女子大学健康生活学部教授）

講 演・2 13:20～14:20

「現実には起きている SNS 等による児童生徒の性被害について考える～若者の性被害の現状と性被害防止の取り組みの実際～」
矢津田竜太（熊本県警察本部生活安全部少年課係長）

体験発表およびフロアとの質疑応答 14:30～16:00

会 場 国立大学法人熊本大学工学部百周年記念館（熊本市中央区黒髪 2-39-1）

参加費・申込み先

【資料代】3,500 円（学生 1,000 円）【定員】200 名【大会申込】下記の 2 種類からお選び下さい

(1)「こくちーず」URL：<https://www.kokuchpro.com/event/082d5667aa6a69af546b2d024db79f06/>

(2) メールによる申し込み ★件名に「2月15日九ブロ参加申込」とお書きください。

①氏名（通称可） ②都道府県名 ③「一般」または「学生・10代」 ④所属 ⑤連絡先（メールアドレスまたは電話番号・※定員を越えた時のお断りの連絡先）【連絡先・問い合わせ先】kumaseikenivent@gmail.com

【主催】熊本県性教育研究会 【共催】全国性教育研究団体連絡協議会九州ブロック性教育研究協議会 【協賛】日本性教育協会（JASE）



「青少年の性行動／日中比較研究」 報告書 2019

30年ぶりに刊行できた本書が、経年調査の比較を含めて、両国の青少年の性意識・性行動の実態を把握できる唯一の報告書です。

編集／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
「第8回青少年の性行動全国調査」委員会内日中比較小委員会
協力／日本青少年研究所・上海社会科学院社会科学研究所

1974年に第1回が開始され、2017年に第8回を迎えた「青少年の性行動全国調査」は本年8月に「若者の性」白書が刊行されました。40年近く続けられたこの調査は、国内を始め国外でも類例は極めてまれで、貴重な調査データとして国際的にも認知されています。

今回の日本における調査に際して他国との比較研究を検討し、上海社会科学院社会科学研究所の協力のもと、中国の青少年の性行動に関してほぼ同一の質問用紙にて調査が実現しました。調査地点は、北京・上海・広州の3地域であり、調査期間は2017年10月から2018年3月までで、調査対象者は中学生・高校生・大学生合計約5000人です。



〈主な内容〉

- はじめに
- 序章 調査の概要
- 第1章 性行動
- 第2章 性イメージの日中比較
- 第3章 避妊行動の日中比較
- 第4章 中国の若者の性行動とその動機
- 第5章 性の情報源の日中比較
- おわりに
- 付表・中国の青少年の基礎集計表

B5判 102ページ

頒価：1,000円



A4判 80ページ

頒価：1,000円



青少年の性行動

わが国の中学生・高校生・大学生に関する第8回調査報告

編集／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
「第8回青少年の性行動全国調査」委員会

若者の性にかかわる行動、規範意識、情報源などが、この6年間でどのように変容したかがわかる。若者の性を理解するための必須の資料！

2017年6月から同年12月にかけて実施した「第8回青少年の性行動全国調査」の単純集計をまとめ一次報告書として刊行。主要な結果「デート経験」「キス経験」「性交経験」などの解説と、全質問の中学生・高校生・大学生の男女別集計結果を掲載。

両書籍とも、JASE ホームページ
からお申し込みいただけます。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html>

または、Email info_jase@faje.or.jp、TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478 までお申し込みください。

●本書に関するお問い合わせにつきましては、下記までお願いいたします。

一般財団法人 日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）

〒112-0002 東京都文京区小石川 2-3-23 春日尚学ビル B1

TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478

Mail info_jase@faje.or.jp URL <https://www.jase.faje.or.jp>



JASE

「若者の性」 白書

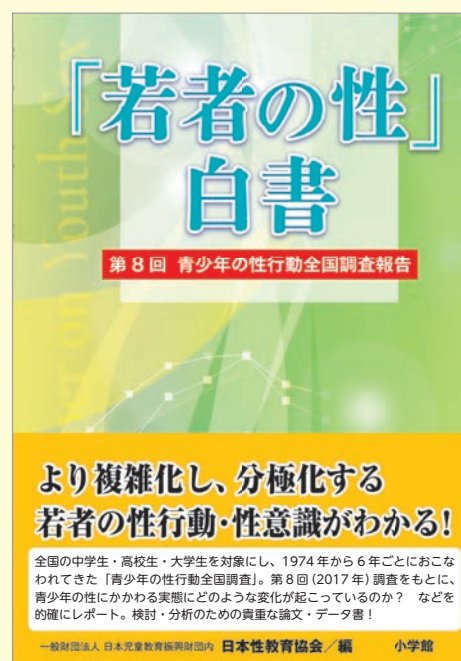
第8回 青少年の性行動全国調査報告

全国の中学生・高校生・大学生を対象にし、1974年から6年ごとにおこなわれてきた「青少年の性行動全国調査」。第8回(2017年)調査をもとに、青少年の性にかかわる実態にどのような変化が起こっているのか？ などを的確にレポート。検討・分析のための貴重な論文・データ書！

主な内容

- 序 章 第8回「青少年の性行動全国調査」の概要
- 第1章 変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化
- 第2章 青少年の性規範・性意識からみる分極化現象
- 第3章 家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか
- 第4章 知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題
- 第5章 青少年の性行動と所属集団の性行動規範
- 第6章 青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性
- 第7章 性的被害と親密性からの／への逃避
- 第8章 青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～
- 付表Ⅰ 「青少年の性に関する調査」調査票
- 付表Ⅱ 基礎集計表(学校種別・男女別)

- ＊コラム
- 1…性情報について
 - 2…性教育をめぐる近年の社会的動向
 - 3…LGBT学生について
 - 4…男性の性的被害
 - 5…「青少年の性行動全国調査」の困難と課題



好評
発売中！

本体2,200円+税
A5判 256ページ

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！